
破れない約束

MUKKU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

破れない約束

【Nコード】

N6327H

【作者名】

MUKKU

【あらすじ】

いつもどおり小五郎を眠らせて推理をするコナンだったが、その瞬間を蘭に見られてしまい…。

第1章 疑惑(前書き)

初投稿です。投稿が定期的に行えないかもしれません頑張っています。

第1章 疑惑

2月の後半になったある日、コナンは蘭と小五郎と共に出席していたパーティーでおきた殺人事件を捜査していた。

もともと小五郎はいつも通り見事な迷推理を披露していたが…。

ひと通り捜査の終わっていたコナンは、いつも通り小五郎を腕時計型麻酔銃で小五郎を眠らせて、蝶ネクタイ型変声機を使って推理を始めることにした。

コナンが麻酔銃の照準を合わせているのを蘭は偶然見てしまった。蘭はコナンが以前園子を狙っていたときに、銀玉が出ると言っていたのを思い出し、叱ろうと口を開けようとしたとき、腕時計の銃口から出てきた針が小五郎に刺さり、その直後に小五郎が眠りの小五郎、独特のポーズをする（眠る）瞬間を見てしまった。

その後、コナンの様子を見てみると、小五郎の後ろに隠れて、蝶ネクタイで声を変えて推理をしていた。

その表情はずっと待ち焦がれている幼なじみの工藤新一にそっくりだった。

その事に驚いている蘭は、小五郎の推理など全く聞いていなかった。

「……という事で貴方が犯人ですね」

という小五郎の台詞によってこの事件は幕を閉じた。その後、コナン達が事務所に戻ったのが午前1時を過ぎていたので蘭は今日見た事をコナンに問い詰めるのは止めておいた。

次の日、蘭がコナンを問い詰めようと思って、コナンの部屋に入ろうとした時、

それまではコナンに本当のことを問い詰めようと思っていたが、
今ではただコナン（新一）に自分の思いをぶつけたくなってきた。

「…この星空、新一も見てかな」

「きつと新一兄ちゃんも見てるよ！」

蘭が心配しないように精いっぱい子供のように言ったコナンであったが、蘭の瞳に涙が浮かんでいるのを見て言葉を失った。

（…蘭！？）

「…コナン君…ゴメンネ…私…たまにコナン君と…新一を…重ねて
見ちゃうんだ…コナン君は新一じゃ無いのにね…」

蘭はここで少しだけ微笑んでいたが、涙を浮かべながらの微笑みは
コナンの心に突き刺さった。

「…でも…でも何でコナン君は新一じゃ無いのにお父さんを眠らせ
て推理をしているの？…なんで新一じゃ無いのに服部君の恋の相談を
受けるの？…新一じゃ無いのに…どうして？…ねえ…どうして？」
蘭の涙はもう沢山流れていた。

泣きながら

「…どうして？…どうして？」

と何度も聞いてくる蘭を見て、コナンは隠し通すのは限界だと悟り、
「蘭もう泣くな」

第2章 本当の事(前書き)

相変わらずの駄文です。

第2章 本当の事

「…コナン君…？」

蘭は涙を止めて言った。

「蘭、お前もつ俺は本当は江戸川コナンじゃ無くて工藤新一だって事分かってるんだろ？」

とコナンは眼鏡を外しながら言った。

「やっぱり…新一なの？」

「ああ…」

蘭はコナンが新一だという事は確信していたが、本人に認められると、声が出ない程驚いていた。

コナンは驚いている蘭に話始めた。

「俺に何があつたのか話すよ…お前とトロピカルランドに行った日…」

ここまで言いかけたコナンにやっと声が出るようになった蘭は、

「待って！新一！話す前に約束して…もう絶対に嘘をつかないって」と言ってきた。

その事に少し驚いたコナンであつたが、

「ああ…約束するよ…でも…訳があつてまだ言えない事があるけど、それは全部解決したら話すよそれでいいな？」

と蘭に聞いた。

蘭は素直に、

「うん…」

と答えてコナンが話すのを待っていた。

「実は…」という言葉からあの日、自分の体が小さくなった時の経緯を話した。

しかし奴らが危険な組織であるという事は蘭をなるべく危険に巻き込みたく無いから伏せておいた。

「…そっか…でも何で私に教えてくれなかったの？…本当に心配し

てたんたよ…」

また蘭の瞳には涙が浮かんでいた。

「…悪かったな…でも、阿笠博士に言われたんだよ…俺が生きている事が奴らにバレるとまた命を狙われて、周りの人間にも危害が及ぶかもしれないってな…だから誰にも言えなかつたんだ。勿論お前にも…」

「じゃあ、なんで服部君は知ってるの？誰にも言えなかつたんじゃないの？」

と、蘭は鋭い事を聞いてきた。

「アイツにはバレたんだよ。流石西の名探偵って言ったところかな」「そっか」

コナンの説明に蘭はある程度納得したようだ。

「じゃあ新一、死羅神様の事件の後の高速道路であった殺人事件の時に言つてた私に聞きたい事って何？新一の推理だと私と同じ事なんでしょう？」

と蘭に聞かれたコナンは眼鏡を掛けて子供らしく、

「蘭姉ちゃん、その答えを僕に聞いて嬉しい？僕はまだ江戸川コナンなんだよ。新一兄ちゃんが帰って来たらきつと全部話してくれるからさ。それまでは僕の事を江戸川コナンとして接してほしいんだ」と言つた。

蘭は少し驚いたようだったが、

「そうだね、じゃあ約束だよ、新一が帰って来たら全部話してくれらるって」

「うん！約束するよ」

「じゃあ改めてこれからよろしくねコナン君」

「うんよろしく、蘭姉ちゃん」

その後蘭のコナンに対する態度が今までと殆ど変わっていない事

がコナンは嬉しかった。

第3章 阿笠邸にて

その次の日の夕方、コナンは昨日蘭に自分が工藤新一だと話した事を博士と哀に伝えるために阿笠邸に来ていた。コナンが話を終えた時、時計は午後7時20分を過ぎていた。

コナンの話を聞いた後、哀は、

「工藤君：あなたとんでもない事をしたわね…これで彼女も私達の正体が組織バレた時…奴らに命を狙われる対象になってしまったのよ…」

と開口一番に言った。コナンは、

「ああ…分かっている。だからこそ奴らを早く潰さないと…」
と、真剣な顔で言った。

その時…

ガタン！

玄関の外で大きな音がした。

「な…何じゃ!?!」

博士は驚いていたが、哀は冷静に、

「ちよつと見てくるわ」と言って玄関へ向かった。

その直後、

「博士！工藤君！すぐに来て！」

と哀の凄く焦った声がした。

「どうした灰原!?!」

コナンが慌て玄関に行くのと血だらけの怪盗キッドが倒れていた。

「キッド!!大丈夫か!?!オイ!?!」

どうやらキッドは拳銃で撃たれているようだが、幸い急所からは外れているようだ。しかし、早く手当てをしないと危険な状態がある事は間違いない。

「灰原！応急処置を頼む！博士は救急車を！」

コナンは大怪我をしている怪盗キッドを逮捕しようなんていう気持

ちは一切無かった。

「でも工藤君、どうするの？彼は月下の奇術師怪盗キッド、病院に
なんか連れて行ったらたちまち逮捕されるわよ」

応急処置をしながら哀はコナンに聞いた。

「いや、キッドは警察に顔はバレて無いから服装変えて博士の親戚
だとか言っとけば大丈夫さ」

コナンはキッドのマントを脱がせながら言った。哀がキッドの素顔
を見て、

「…博士よりあなたの親戚にした方がいいわね…」

と呟いた。コナンもキッドの素顔を見て啞然とした。

それ程怪盗キッドと工藤新一は似ているのだった。

怪盗キッドはコナンが工藤邸から持って来た新一の服を着て、救
急車で東都大学付属病院へ運ばれた。

怪盗キッドは腹部と肩を打ち抜かれていたが、急所を外れて、哀
の措置が良かったため命に別状は無く無事に手術は成功した。

第4章 キッドに起こった事(前書き)

会話が主です。相変わらずの駄文…

第4章 キッドに起こった事

怪盗キッドの手術が無事終わった次の朝、キッドは目を覚ました。

「…ここ…ここは…?」

キッドは意識がはつきりしない状態で呟くように言った。

「東都大学付属病院だよ、怪盗キッド」

突然コナンの声を聞いて焦った様子のキッドだったが、少し落ち着くと、

「ああ…俺から来たんだっとな…どうもこの様子じゃ警察に通報してないようだな…」

とコナンに言った。

「ああ…流石にあの状態のお前を逮捕させる訳にはいかないからな…で、何があっただんだ?」

コナンが聞くと、

「盗んだ帰りに怪しい取引現場を目撃して、それに気づかれて撃たれた…30m位上にいたのに…たいした銃の腕前だな…」とキッドは皮肉そうに笑った。

「取引していた奴らの特徴は?」

コナンはもしかしたら自分が追い続けている奴らかもしれないと思いを聞いてみた。

「取引をした片方は建物の陰で見えなかった…でも、もう片方は全身黒づくめの4人組みだったぜ…顔はよく見えなかったけど1人は銀髪で髪の毛の長い男だった…あと、近くに黒いポルシェ356Aがあっただな…多分取引をしていたどっちかの車だ」

コナンはもしかしたらと思っていた予想が当たっていて凄く驚いた。

「く…工藤君…ま…まさか!?!」

哀も同じように驚いた様子で言った。

「ああ…奴らだろうな…」

と、2人はキッドに聞こえてないように話していたが、

「どうした、名探偵？お前の体が縮んだ事に関係あるのか？」
というキッドの言葉でさらに驚いた。

「な…何で…それを…」

とても驚いているコナンをよそにキッドは、

「ああ、前、メモリーズ・エッグの事件あっただろ。あの時俺が白鳥警部に変装していた事は分かってるよな…あの時船の中でお前が阿笠博士に電話でスコープオンについて調べてもらってるのを聞いて、その後調べたんだよ。まあ、状況証拠しかなかったし、どうして縮んだのかも分からなかったけど…その様子じゃ当たっているな。どうして体が縮んだんだ？俺を撃った奴と関係があるんだろ？」

ここまでバレているのなら話すしか無いと思い、コナンはキッドに全てを話した。

コナンが一通り話した後、哀が口を開いた。

「今、工藤君が話したとおり、アナタを狙撃したのはとても危険な組織なの…アナタが生きていると知ったら必ず命を狙うでしょうね…そればかりかアナタの正体を調べてアナタに関係した全ての人物が危害を受けるわ…それが嫌なら、奴らが潰れるまで怪盗キッドとして活動しないことね…」

それを聞いてキッドは、

「なら、俺も奴らを潰すのを手伝うぜ。俺にはやらないといけない物があるからな」

と言った。コナンが、

「盗みがそんなに大事かよ!？」

と、怪訝そうな顔で言うと、

「俺にはどうしても手に入れないといけない宝石があるんだ。それ以外は興味無いよ。それが手に入れば俺は怪盗キッドを辞めるさ」
とコナンをなだめるように言った。

第5章 小五郎への依頼

キッドが目を覚ました3日後、コナンは事務所で漫画を読んでいた。小五郎も依頼が無く、テレビを見ていた。

すると蘭が帰って来て、

「ただいまー！お父さん、依頼来てるよ！」

と言って来客を事務所に入れた。

その来客を見た時、コナンと小五郎は叫びそうになった。

その依頼客は、高校生らしい少女だった。

何故コナンと小五郎が叫びそうになったかと言うと、その少女は蘭にそっくりだったのだ。

「私、中森青子です。父にキッドキラーの男の子がいる探偵事務所の事を聞いたので、依頼したい事があるんです！」

コナンは彼女の言った言葉で気付いた事があつたので聞いてみた。

「お姉さんもしかして捜査二課の中森警部の娘さん？」

すると青子は少し驚いて、

「すごい！！すごい！！よくわかったね！！君がキッドキラーのコナン君？」

と笑顔で聞いてきた。

コナンは子供っぽく元気に、

「うん！」

と答えた。

話が脱線している事に気付いた小五郎は慌てて、

「それで、捜査して欲しい事とは？」

と聞いた。

青子は思い出したように、

「人を探して欲しいんです。私の幼なじみの黒羽快斗が4日前の夜から行方が分からないんです」

と言って青子が小五郎に出した写真を見て3人とも心底驚いた。

蘭と小五郎が驚いた理由は新一にそっくりだという理由だった。

「…新一にそっくり…」

蘭は思わず呟いていた。

それを聞いた青子は蘭に、

「どうしたの？ 蘭ちゃん？」

と不思議そうに聞いた。

「どうやら事務所に来る前に2人は自己紹介を終わらせていたらしい。」

「彼…私の幼なじみの新一って人とそっくりなの…ちょっと待って、彼の写真持って来るから！」

と言って蘭は事務所を出ていった。

一方、コナンは2人とは別の理由で驚いていた。

それは、彼女が探している人物が今自分達が保護している怪盗キッドだったからだ。

蘭がアルバムを持って帰って来て、青子に、

「これが私の幼なじみの新一」

と言って写真を見せた。

すると、青子も驚いて、

「すごい！！青子、他人でこんなに似ている人見るの初めて！！」
と言っていた。

蘭も、

「私も初めて」

と相槌を打っていたが、コナンと小五郎はそんな二人の顔を見比べ、複雑な表情をしていた。

青子が帰った後、コナンは黒羽快斗がいる病院へ向かった。

慌てたように走ってきたコナンを見て、快斗は、

「どうした？名探偵？」

とふざけ半分で聞いたが、

「お前…黒羽快斗って名前なんだな…」

と言われて表情が一変した、

「ど…どうしてそれを…」

驚きを隠せないでいる快斗にコナンは、

「中森青子っていうお前の幼なじみがお前の行方探しておっちゃんに依頼して来たんだよ」

と答えた。

快斗は動揺して、

「アイツに俺の事教えたのか？」

と尋ねてきた。

「イヤ…話してねーよ…彼女、お前が怪盗キッドだって知らないよ
うだったからな…」

と答えた。

それを聞いた快斗は安心したようだった。

第6章 西の名探偵（前書き）

関西弁が難しいです。変だったらすみません。

第6章 西の名探偵

青子は捜査状況を聞くために毎日探偵事務所に来ていて、そのうち蘭やコナンと仲良くなった。

青子が小五郎に依頼しに来て3日後、コナンと蘭が事務所で青子と話していると、来客が来たようだった。

それに気付いた蘭が玄関に向かった数秒後、

「蘭ちゃん！ 久し振りやね！」

と元気な関西弁が聞こえてきた。

その声でコナンは厄介な来客が来た事を悟った。

今の声の主が厄介なのではない。彼女はいくら来ても構わない。しかし、彼女がここに来たという事は必ずあの男が来ているのだ。

「よう！ ネーチャン！ くど…眼鏡の坊主おるか？」

やっぱり…西の名探偵、服部平次が来ていた。

コナンは肩を落としながら玄関に向かった。

コナンと一緒に出てきた青子を見て、大阪から来た2人は思わず叫んでしまった。

「！…ら…蘭ちゃんが2人！」

「ネーチャン！ 双子やったんか？」

と言う2人に蘭は笑いながら、

「違うよ。お父さんに依頼に来て友達になった中森青子ちゃん」と紹介した。

和葉は、

「なんやん、そうやったんか」

と言ってすぐに青子と打ち解けていた。

「…で服部…何の用だよ？」

コナンは不機嫌そうに平次に聞いた。

「…何や工藤、エライ不機嫌やな…暇やったから工藤に会いに来てやったのに…」

と平次が笑顔で言った。

コナンは溜め息をついて、

「しゃーねーな、まあお前が来たなら話とかなきゃいけねー話があるから、阿笠博士んとこ行くぞ…」

蘭姉ちゃん！平次兄ちゃんと阿笠博士んとこ行って来るね」

と蘭に話すときはとても子供らしく言った。

「…で、俺に話って何や？」

博士の家に行く途中、コナンに平次が聞いてきた。

「ああ、俺が工藤新一だって事が蘭にバレた」

コナンは何も無いように言ったが、平次はとても驚いていた。

「何〜！！」

工藤！お前全部話したんか！？」

「イヤ、蘭には組織の事は話してねーよ」

「そうか…でも何で俺をジイサン所に連れて行くんや？和葉に聞かれとうなかつたらお前の部屋でも出来るのに…」

と話している内に博士の家の前に来ていた。

「ああ、それはお前に会わせたい奴がいるんだ。今日退院だっ言つてたからもう来てるはずだぜ」

と言つて博士の家のドアを開けた。

「来てるって誰がやねん！」

とコナンがリビングのドアに手を掛けた時平次が言った。

しかしそこにいた男を見て一瞬言葉を失った。

「く…工藤が二人！？それともネーチャンみたいに他人の空似か？」

「ああ、他人の空似だよ。こいつの名前は黒羽快斗、お前の知ってる呼び名だと、月下の奇術師怪盗キッド」

「なんやてー！？オイ工藤どついう事か説明しい！」

平次は驚きのあまり大声で叫んでいた。

その大声はコナン、哀、博士、快斗の4人共耳を塞いでいたのに、4人共鼓膜が破れると思った程だった。

第7章 FBIからの情報

コナン、哀、博士、快斗の4人は平次が落ち着くのを待って説明した。

「つまり…キッドの本名は黒羽快斗で、工藤をちっこくした組織に工藤達同様に生きとる事がバレると命狙われから、組織を倒すのに協力する訳やな…」
と平次が納得した時、

ピンポン

と、チャイムが鳴った。

来客を迎えに行った哀を待っていると、FBI捜査官のジヨディ・スターリングが哀と一緒に来た。

「ジヨディ先生！どうしたの？」

コナンは少し驚いて聞いた。

ジヨディは少し平次と快斗を見て、

「話があるけど、お客さんが来てるなら後でいいわ」

と言って外に出ようとしたが、平次が、

「大丈夫や俺も黒羽も組織の事知つとるし、工藤の力になりたいんや」

と言ったから立ち止まった。

「…工藤？…黒羽？」

ジヨディが不思議そうな顔をしていたので平次は、

「ああ黒羽はこいつや…ってか工藤、お前散々FBIに力借りとるのに、自分の正体話してないんかい!？」

とりあえず快斗の事をジヨディに紹介してからコナンに問い詰めた。

「…ってか誰この人？」

ジヨディと初対面の快斗は不思議そうに聞いた。

「FBI捜査官のジヨディ先生じゃよ」

と博士は快斗に教えた。

快斗の事は分かったがまだ工藤が誰だか分からないジヨデイは、

「…じゃあ工藤は？」と聞いた。

「僕だよ…江戸川コナンは本名じゃ無いんだ…本当は高校生探偵の工藤新一なんだ」

と言ってジヨデイに組織との関係を全て話した。

「…そうだったの、だからコナン君は組織を倒そうとしてたのね」とジヨデイは納得したように言った。

「で…用事って何？」

話が脱線している事に気付いた哀はジヨデイに聞いた。

「あ、そうそう、コナン君、哀ちゃん、組織のアジトが分かったのよ。でジェームズにコナン君達が組織を倒そうとしている目的を聞いてくるように言われたから」

「じゃあ、僕達も行くよ」

ジヨデイの話を聞いてコナンは行く事を決意した。

「ダメよ危険すぎるわ」

と止めたが、

「そんな事で諦める私達じゃ無いわ」

「そや！工藤を元に戻すチャンスなのにFBIだけに任せて指をくわえて待つてられるかい！」

「俺だつて奴を倒さないと、仕事が出来ないんだ！」

とコナンだけでなく哀、平次、快斗の3人まで行く気満々なのを見て、

「しょうがないわね…ジェームズの許可がおりたらよ」

と言ってジェームズに電話したが事情を話したら案外すんなり許可がおりた。

第8章 作戦会議（前書き）

今回は少し短いです。

平次が何故かテンション高めです。

第8章 作戦会議

「許可がおりたんや！ほな、行くで！」

ジェームズの許可がおりた途端平次は出発しようとしたが、

「…行くって何処に？私達何処に奴らのアジトがあるかまだ聞いてないでしょう？…あなた知ってるの？」

という哀の言葉で立ち止まった。

さらにコナンの、

「あと、組織に潜入するのはFBIのこの作戦の本部に行ってからだ。俺達だけで勝手に行動する訳いかねーだろ」

という駄目押しで、

「そうだったら早よう本部に行くで」

と叫んでジョディ先生の車に向かった。

残った皆は溜め息をついてその後について行った。

本部に着いた時、この作戦のボス、ジェームズ・ブラックがコナン達が来るのを待っていた。

「待っていたよ、コナン君…イヤ、工藤君」

ジェームズは笑顔で皆を本部へ招いた。

ここでコナン達は今回の作戦に参加するFBI捜査官達に、コナンが工藤新一だという事、哀の本名が宮野志保で、数ヶ月前までシェリーというコードネームで組織にAPT X 4869という毒薬を作らされていた事、快斗が怪盗キッドである事、そしてこの3人が生きている事がバレると、命が狙われる事を話した。

あた、FBIは今回の作戦の後、哀は組織とは無関係という事にして、快斗が怪盗キッドだという事は知らない事にしてくれる事を決定した。

その後、ジェームズは5人に今回の作戦と5人の役割分担を話した。
「さて、今回の作戦だが、幾つかのグループに分けて行こう。その内、コナン達と平次君はジョーディ君と一緒に組織のボスを倒すグループに入って協力してくれ。あと、哀君と阿笠さんは薬のデータコピー、快斗君は私達のグループと一緒に哀君達の護衛だ。分かったね」
「ハイ！」
5人は自分の役割に不満は無かった。

その後、5人に防弾チョッキと拳銃が配られた。

平次は受け取る時、

「俺は剣道があるんやから要らんのに…」
と呟いていた。

第9章 それぞれの戦い1

コナン達はアジト侵入する事に成功した。哀達の向かう研究所はアジトの隣にある建物だったから既に別行動になっていた。

組織の下っ端達はFBIが来た事に恐れをなして銃を捨てて案外すんなり捕まった。

その後コナン達が入った部屋にはベルモットが待ち構えていた。ジョディが、

「FBIよ！銃を捨てて大人しくしなさい！」

と銃を構えると、ベルモットは一瞬微笑んで銃を捨てた。「…やけに大人しいじゃねえか…ベルモット…」

とコナンが警戒した様子で聞くと、

「別に：無駄な事はしたく無いからね…この人数に勝ち目が無いから大人しくしてるだけよ…」

と言って大人しく捕まった。

FBI捜査官の1人に連れて行かれる時、ベルモットは

「cool guy：気をつけなさい…次の部屋にいるジンは私みたいに簡単に捕まる訳無いし、ウオツカも一緒の筈だからもしかしたら、全滅させられるかもしれないわ…」と忠告した。

「上等や！そんなん受けて立つたる！」

と平次が吠えている時コナンはベルモットに、

「何で、お前はそんなアドバイスなんてしてくれるんだよ？」と聞いてみた。

すると、ベルモットはウインクしながら、

「A secret makes a woman woman」
と言って答えなかった。

「…またそれかよ…よし！服部行くぞ！」

「オウ！」

と言って2人は、先に行っているFBI捜査官達を追いかけて走って行った。

「…頑張りなさいよ…silver bullet…」

2人のFBI捜査官に連行される中、ベルモットは走って行くコナンをみて呟いていた。

一方、哀達は研究室に入る前の小部屋に入った。

そこに1人の人影があり、FBI捜査官達は銃を構えたが、

「あら、FBI来たの…」

という声で銃を下ろした。

「…なんだ、水無君か…」

ジエームズはホツとしたように言った。そこにはCIA諜報員の水無怜奈がいた。

「ここは組織のアジトでは無いし、ボスも幹部もここには居ないわ…彼等がいるのは隣のアジトよ…」

と伝えた。

「ああ、我々は毒薬のデータを手に入れるために来ているのだから構わない。それに向こうにはもっと大人数で行っている」

とジエームズは怜奈に伝えた。

「…そう、なら研究室はこの扉の向こうよ…」

と言って怜奈は道を開けた。

「…あれって元アナウンサーの水無怜奈だよな…何で組織に？」

怜奈がCIA諜報員である事を知らないキッドは驚いていた。

既にキャラが快斗に戻っている…

哀は溜め息をついて、
「彼女はCIAの諜報員よ、組織の潜入捜査しているの…大丈夫、
身方だわ」
とキッドに説明した。

コナンと哀はそれぞれの目的を果たすためにそれぞれの扉を開い
た。

第10章 それぞれの戦い2 (前書き)

少々話が強引かもしれませんが

第10章 それぞれの戦い2

哀達は研究室に入った。

FBI捜査官達が研究員達を捕まえた後、哀は研究室のコンピュータを立ち上げた。

「お前：もしかしてシェリーか？」

研究員の1人が哀に聞いた。

「……………」

哀は無言でコンピュータの操作を続けた。

その時、画面に

『パスワードを入力してください』
とでた。

哀は躊躇う事なく

『shellingford』

と入力した。

「何故だ！？シェリー！お前にはパスワードは知らされて無しはずだ！」

さつき、哀にシェリーかと聞いてきた研究員が哀に聞いた。

「…出来損ないの名探偵、パスワードを聞いていなくても、この言葉は聞いているわ…前、このデータをコピーできるかもって時に工藤君に聞いたのよ…まあ、ホームズマニアの彼だから分かった事ね…」

と、データをコピーしながら、聞いてきた研究員というよりFBI捜査官達に話していた。

それを聞いていたキッドは誰も居ない方向を向いて、

（ハハハ…じゃあ白馬の野郎も分かっただろうな…俺との対決の時いつもホームズのコスプレしてるホームズフリークだし…）
と海外に留学しているキザなクラスメートを思い出していた。

そんな事を考えていたら、ふと不思議な光を放っている物を見つ

けた。

(…何だ…あれ?)

と思い見てみるとそれは見たこともないような光を放った赤い宝石だった。(…!!まさか…これ…パンドラか!?)

キッドは目を見開いていた。

「あつ、それは!」

キッドがパンドラを手を取っているのを見つけた研究員が声を上げた。

「…やっぱり、これはパンドラだな…」

とキッドは研究員達に聞いた。

その目はとても鋭いもので研究員達は皆頷いた。

(…だったら…親父を殺したのはこの組織って事か…)
と苦笑いしていた。

「…コピー完了…怪盗さんも目的を果たしたなら行くわよ…」

データのコピーを終えた哀はキッドに声をかけた。

FBI捜査官達を先頭に部屋を出ると、キャンティとコルンが待ち構えていた。

一方、コナン達が開いた扉にはジンとウォッカが待ち構えていた。

「…ジン!…ウォッカ!…」

コナンは低い声で呟いた。

「じゃあ工藤…こいつ等がお前の言つてた…」

「ああ…グラサンの奴がウォッカで…」

「…なら、あの髪の毛の長いのがシュウの追つてたジンって奴ね…」

平次、コナン、ジョディの3人が話しているのを聞いていたジンは、

「フン…俺の事がこんなガキに知られていたとはな…それに死んだ赤井の話まで出てくるなあFBIも随分と余裕なんだな…」

と笑いながら言っていた。

ウオツカが銃を構えようとした時、

スバアアアン!

コナンが蹴ったサッカーボールがウオツカの手首に当たって銃をはじいた。さらにその後、コナンは銃の引き金を引いた。

コナンの撃った弾はウオツカの手から放れた銃に当たり、銃口を曲げた。

「…やるじゃねえか…ガキ…テメエ…ただのガキじゃねえな?」

というジンの問いに、コナンは不敵に微笑んで、

「江戸川…イヤ…工藤新一…探偵さ!…本当はジンお前にやるつもりだったけど…お前には全く隙が無かったからな…」

と答ええて2人は睨み合っていた

一方銃を失ったウオツカは、走って部屋の横にある扉から逃げに行った。

「あつ!…こらテメエ!待てや!!」

と叫んで平次がウオツカを追いかけて行ったのを気付いたFBIの内の数人が平次に後を追ってウオツカを追いかけて行った。

残ったFBI捜査官達は睨み合うコナンとジンの空気に吞まれていた。

第11章 決戦(哀&mp;キッド)(前書き)

今回コナン達は出てきません。
哀とキッドが主です。

第11章 決戦（哀&キッド）

キャンティとコルンを見たキッドは、

「あー！こいつ等俺を撃つた2人だ！！」
と叫んだ。

するとキャンティは

「ああ、あの白い泥棒坊やかい？生きてたのかい？」
と笑いながら言った。

コルンは、

「俺…こいつ…殺りたい…」

と、小さな声で言った。

それを聞いたキッドは、

「殺られてたまるか！！パンドラを見つけたのに壊す前に殺される
訳にはいかねーよ！！」

と叫びながら哀に何かを渡した。

哀は小さいため、FBI捜査官達に紛れて、キャンティ達には見
えていないのだ。 キャンティ達が銃の照準を合わせ始めた時、2
人の後ろから、

「止める！！」

と低い声がした。

2人は振り向いたがそこには誰もいなかった。

その時、2人の足下から、

カラン

という音がして、2人が下を見ると、機械のような物から白いスプレ
ーが出てきた。

「なんだいこれ！？」

キャンティが叫ぶと、ガスマスクを付けたキッドが、

「御安心を、ただの催涙スプレーです。ちなみにさっきの声は、私
の声色をあなた方の後ろの扉に取り付けたスピーカーから出しただけ

です」

とキッド口調で言った。

その時、催涙スプレーが部屋の四隅からも出てきた。

これでキャンティ達は催涙スプレーから逃げられなくなったが。

FBI捜査官達もスプレーから逃げられなくなった。その時、

シュ！

と何かが空を切る音がしたかと思うとコルンが倒れた。

そして、コルンの前にはガスマスクを付けた哀がコナンの腕時計型麻酔銃の予備をコルンに向けていた。

哀があの時キッドに渡されたのはガスマスクだったのだ。

「コルン！どうしたんだい！？コルン！」

催涙スプレーで目が開かないキャンティだったが、コルンが倒れた気配がしたので叫んでいた。

キッドは、混乱しているキャンティの前に来て、キャンティの顔に催眠スプレーをかけた。

これでコルンもキャンティも捕まえた。

「さあ！2人は捕まえました！早くここから出ましょう！」

キッドはFBI捜査官達を促して、外にでた。

「しかし、もう少し我々の事も考えてくれなかったのかね？」

部屋をでたジェームズはキッドに聞いた。

「すみません…誰も怪我しないように敵を捕まえるのかあれしか方法が無いと思ったので…」

とキッドは申し訳なさそうに言った。

「…確かにあの時、奴等から見えていない私以外にガスマスクを渡すのはリスクが高いわね…まあ、誰も怪我しなかったし、結果オライなんじゃない？」

と哀もキッドに味方していた。

その時阿笠博士はぽつりと

「こつちの作戦は成功じゃったが新一達は大丈夫じゃろうか？」
と呟いた。

それを聞いた哀は、

（工藤君…必ず生きて帰って来なさいよ…蘭さんのためにもね…）
と頭のなかで、今、アジトで組織と戦っているであろう名探偵に呼び掛けた。

第12章 決戦（平次）（前書き）

今回の主役は平次です。関西弁が変かもしれませんが…。

後、今まで「快斗」の事を「快人」と書いていました。既に「快斗」と修正しましたがどうもすみませんでした。

第12章 決戦（平次）

平次はウォツカを追って走っていた。

FBI捜査官達も何人が付いて来ているが平次に追い付け無かった。

ボタン！

と、急に扉を閉じる音がした。

しかし、FBI捜査官達は完全に平次とウォツカを見失っていた。

「その部屋やな…」

ウォツカが部屋に入るのを見ていた平次は、追いかけている最中に拾った鉄パイプをグツと握り締めた。

平次が部屋に入った瞬間、ウォツカが何かを振り下ろしてきた。
「なっ！！」

平次は辛うじて鉄パイプで受け止めた。

平次はウォツカが振り下ろしてきた物を見て、

「…刀やんか…危なかつたわ…」と冷や汗をかいた。

ウォツカは更に刀で襲ってきた。

スピードは平次の方があがるが、ウォツカの激しい攻撃で圧倒的に押されていた。

（…ヤバいで…どうにかせんと…避けるのには限界があるで…）
と、考えていると一つの案が浮かんだ。

（…少し危険やけど…やらんと殺られるんや！）
と、心の中で叫んでそれを実行する事にした。

平次はウォツカから少し離れた所で立ち止まった。

それを見たウオツカが平次が観念したのだと思っただらしくニヤリととして平次に切りかかった。

平次はウオツカが切りかかって来た瞬間、少し後ろに下がってから思いつ切りジャンプした。

しかしその時、ウオツカの刀が平次の肩を少し掠めた。

平次は小さく舌打ちをして、ウオツカの刀に右足を掛けた。

その瞬間、ウオツカには平次が飛んだかのように見えた。

ウオツカの刀に右足を掛けて踏み台にした平次はウオツカの頭上を飛び越えて、完全にウオツカの後ろを取った。

「な!？」

驚きながら振り向いて来たウオツカに平次は、

「俺の勝ちやああああ!!」

と叫びながら鉄パイプでウオツカの腹を思いつ切り打った。

「ガハア!!」

とウオツカは声をあげて倒れた。

「ふう…危なかったで…」

と倒れたウオツカから刀を奪った平次が一息つこうとした時、

ガチャ

扉の開く音がした。

一瞬刀を構えた平次だったが、来たのがカメラ捜査官率いるFBI捜査官達だと判ると安心して、

「なんや…FBIやん…一足遅かったな…こいつはもう俺が倒してもうたで…後はあんたらの仕事や…こいつを連行するんは5人いれば十分やる…早よ工藤んトコいくで」

とFBIを仕切っていた。

その後平次達は気絶しているウォッカを縛り上げた後にコナン達のサポートをするため、コナンとジンが戦っている部屋に向かった。

第13章 決戦(コナン)(前書き)

なんか迫力に欠ける気がします…

第13章 決戦（コナン）

コナンとジンが互いに銃を向け合っていると、空気に呑まれていた。ジョーディ達も我に帰ってジンに銃を向けようとした時、

「ここは、僕に任せてくれないかな…大人数で行くとジンが乱射して沢山の人が怪我しかねない…それより1対1でいった方がリスクは少ないと思うよ…もしヤバくなったらサポートよろしく…」
とコナンは静かに言った。

その口調があまりに真剣だったので、ジョーディ達は大人しく従った。それを聞いていたジンは、

「フツ…確かにそれは正しい判断かもしれないな…相手が俺じゃなければな…どうせガキを殺った後ここにいる全員を殺るんだ…変わるねえよ…」

とコナンに銃を向けながら言った。

「…んな事させてたまるかよ!!」

コナンは叫んだと同時に引き金を引いた。ジンも同時に引き金を引いていた。

コナンの撃った弾はジンの肩を掠め、ジンの撃った弾はコナンの頬を掠めた。

この瞬間コナンとジンの戦いの火蓋が切って落とされた。

コナンとジンの銃撃戦が始まって数分が経った。

明らかにジンの方が優勢である。

ジンの傷は最初の頬掠めた時の傷だけだったが、コナンの傷は既に3発肩や脚を掠めている。

(ヤベーな…ガキの体じゃ体力が持たねえ…)

コナンの傷は掠り傷程度だが、子供の体だから体力の限界が近づいていた。

そんなコナンを見てジンは笑いながら、

「ガキのクセによくやったな…だか終わりだ…」

と言ってコナンの腹に銃を撃った。

「ゲワアア!!!」

ジンに撃たれたコナンは防弾チョッキを着ていたが、以前撃たれた傷が開いてしまった。

「ハアハアハア…」

コナンは意識が朦朧としてきたが耐えていた。

「ホウ…まだ立ってられるか…なら今すぐ楽にしてやる…」

と、ジンはコナンの頭に銃を向けた。

(ヤベー…このままじゃ…フツ…俺もここまでか…情けねえ…)

とコナンは半分諦めて自分の情けなさにフツと笑った。

と、その時、コナンの顔に蘭の顔が浮かんできた。

(そうだな…蘭と約束したんだ…元に戻ったら…全部話すって…だから…)

「殺されてたまるかよ!!!」

と、コナンは叫んで、ジンが引き金を引くよりも速く発砲した。

コナンが撃った弾はジンの左手から拳銃を奪った。

ジンは、

「クッ！」

と小さく声を出して銃を拾おうとしたが、コナンが、

「させるか!!!」

と言ってジンの脚に銃を撃ったため、バランスを崩してその場に倒れた。

「ハアハア…チエツクメイトだ…ジン…」

コナンが撃たれた。腹を押さえながらジンに言つと、

「フツ…確かに俺の負けだ…俺がやられたなら…あの方も組織も終わりだな…」

と言つて薬のカプセルを取り出した。

そのカプセルには、コナンも見覚えがあつた。

(まさか…APT X 4 8 6 9…!)

それを見た時、コナンはジンが何をするつもりなのか分かつた。

「んな事…させねーよ…」

自分の体力も限界に達しているコナンだったが、ジンが自決しないように腕時計型麻醉銃で麻醉針を撃ち込んでジンをねむらせた。

「罪を償う前に…死ぬなよ…バー口…」

と、気絶しているジンに呟いた時、勢い良く扉の開く音と共に、

「大丈夫か工藤!…」

という怒声が鳴り響いた。

「…服部…ウオツカを倒したみてーだな…」

とコナンは弱々しく言つた。

「工藤!!めっちゃ血出てるやんけ!!ジン倒しても早く治療せんとヤバいやろ!!…おっしゃっ!!ジヨデイ先生、俺は工藤を外に連れてつて治療して貰つてくから、後は任せたで!!…」

と、コナンをおぶりながら言つた。

コナンと平次が外に出ると、哀と快斗、博士が心配そうに待っていた。

一番最初にコナンに気付いたのは哀だつた。

「ちよつと!?工藤君!?大丈夫!?!」

と言つ哀の言葉で快斗と博士もコナンに近寄つた。

「…灰原…薬のデータは…？」

弱々しい声でコナンが哀に聞いた。

「大丈夫…手に入れたわ…それより早く治療しないと！」

と博士に医者をよばせた。

「名探偵…大丈夫か？…俺も目的果たさせたぜ…これがパンドラだ」と言つてコナンにパンドラをみせた。

「そか…ならもう盗みをするんじゃないぞ…」

と、コナンは快斗に少し微笑みながら言った。

その時、

「みんな！！ジヨディ君からの連絡だ！！だった今、組織のボスを捕まえたそうだ！！！」

と言つジエームズの声がした。

その声を聞いたと同時にコナンの意識は遠退いて行った……

第14章 コナンの真実(前書き)

皆少しキャラが変わっているかもしれません。

第14章 コナンの真実

「……………ん！！！！ン君！！コナン君！！！」

(……………ここは……………?)

誰かが自分を呼ぶ声でコナンは目を覚ました。

「……………ここは……………?’

とコナンが目を開けて言うと、コナンの目の前には、涙を浮かべた蘭がいた。

「コナン君……………よかった！」

「……………蘭……………」

自分が目を覚ましたのを泣いて喜んでいる蘭を見た後、コナンは周りを見渡した。

どうやらここは病院らしい。

病室にはコナンと蘭以外に、和葉と青子、博士がコナンを心配そうに見ている、平次と快斗、哀がホツとしたような顔でいて、小五郎は不機嫌そうな顔をしていた。

「くど……………ボウズ！！目え覚めたんやな！！！」

コナンと平次の目が合った時、平次が嬉しそうに言った。

「あなた、相当の強運ね……………かなりの量を出血していてかなり危険だったのよ……………」

平次の言葉が終わった後、哀が静かに言った。

この2人の台詞が終わった後、和葉に、

「でもコナン君……………いくら平次といっしょにいたら知り合いのFBI捜査官がいたからって、それに付いてって危険なことしたらあかんやん……………！！！」

と叱られた。

さらに青子にも、

「そつだよ……………青子心配したんだから……………！！！」

と青子にも叱られた。

その2人を博士が、

「まあまあ、コナン君も無事じゃった事だし、そんなに怒っても仕方ないじゃろ」

となだめていた。

「そうだよ。街でバツタリ会って意気投合した俺も面白がっていっしょに行ったのが悪いんだからさ!!」

と快斗もフォローしていた。

どうやら、コナン達と快斗は街でバツタリ会って意気投合した事になっているらしい。

ここで今までずっと無言だった小五郎が口を開いた。

「オイ、コナン!! お前がここに担ぎ込まれた時、蘭がお前の事『新一』って呼んでいたけどどういいう事だ!!」

と、コナンに怒鳴った。

「お父さん!! 今はそんな場合じゃないでしょ!!」

とコナンが新一だと知っている蘭は小五郎を止めようとしたが、

「…いいよ…蘭…」

と言うコナンの静かな声で黙った。

「今から俺にあった出来事を全部話すよ…」

急に発したコナンの大人びた声に、何も知らない小五郎、和葉、青子は驚いていた。

コナンは自分が工藤新一だという事と、まだ、蘭にも教えていない組織の事を全て話した。

また、APTX4869の事は哀が自分の正体と共に話した。

コナンは話し終わった後、

「みんなに頼みがあるんだけど、この事は誰にも言わないで欲しい

…蘭の母さんと園子には話してもいいけど…」

と頼んだ。もつとも、後半は蘭に頼んだのだから…さらに、
「後、俺がこの姿でいる間は出来る限り今まで通りの対応でいて欲しい。江戸川コナンって存在は俺が新一に戻るまで実際に存在しているから…」
この2つの頼みを皆了承してくれた。

「そうか…じゃあ俺が急に『眠りの小五郎』って呼ばれるようになったのはお前のせいか…」

コナンが話し終わった後小五郎が呟いた。

何かを考えている様子だったが

「…だったら俺はこれから自分の力で名探偵になってやる覚悟しろよ！！探偵ボウズ！！」

と考えがまとまったように言った。
それを聞いたコナンが

「うん！！これからもよろしくねおじさん！！」

と子供らしく言うのと、

「ウツセー！！…じゃあコナン、俺、仲間に麻雀に呼ばれているから行って来る…」

と小五郎は少し赤くながら言って、去って行った。

それを聞いた蘭は少し微笑み、

「全く…お父さんだったら…麻雀になんか呼ばれてないのに…ただの照れ隠しよ…」

と言ったのを聞いて、コナン、平次、快斗、和葉、青子は笑った。

第15章 快斗・キッド(前書き)

サブタイトルはあんまり関係なしです。

第15章 快斗：キッド

5人の笑いが止んだ後、蘭はコナンにある事を聞いてみた。

「ねえ、新一、コナン君が新一に戻る時、歩美ちゃん達はどうするの？」

コナンは思ってもみなかった事を聞かれて少し考えていたが、しばらくして、

「あいつ等には海外にいる両親の所に帰った事にするよ…元々そういう設定だったし…」

と少し悲しそうな顔で言った。
すると、

「ダメよ！…そんなの！…他のクラスメートはまだいいとして、いつも一緒だった少年探偵団の皆には本当の事を話さないとダメ！…」と、蘭に怒られてしまった。

怒った口調の蘭に少し驚いた様子のコナンだったが、蘭が話し終わると微笑んで、

「そうだな…あいつ等にはちゃんと話さねーとな…」
と言った。

蘭はそれを見て嬉しそうな顔をした。

その後、暫くして平次が思い出したように、

「そういえば…黒羽、お前そのネーチャンに話す事あるんちゃうか？」

と言った。（ちなみに『そのネーチャン』というのは青子の事だ）

快斗はそう言われて少し動揺しながら、

「な…何の事だよ、平次？」

と言った。

その2人の会話を聞いて、コナンも面白そうに、

「そうだな…お前がどうしても話さねーって言うなら俺と服部が話してやってもいいぜ…勿論、関係者をもう少し呼んで探偵としてな…」

と言った。

そう言われて快斗は完全に焦って、

「分かったよ!!!」

と連呼していた。

そんな様子を蘭、和葉、青子は訳の分からないような表情、コナン、平次、哀は面白そうな顔で見ている。

「で…青子に話して何？」

最初不思議そうな顔をしていたが興味が湧いてきて青子は快斗に聞いた。

「青子…ゴメン!!!…俺…怪盗キッドなんだ…」

快斗のこの言葉で青子は言葉を失った。

「……なん…で?…」

やっと声が出るようになった青子は快斗に聞いた。

「なんで快斗がキッドなの!?!」

そう叫ぶ青子の目からは涙が流れていた。

快斗は、

「ゴメン…青子…」

と、言ってから自分が怪盗キッドになつた理由を話した。

快斗は話の途中でパンドラをポケットから取り出した。

「…綺麗…」

パンドラを見た時、青子、蘭、和葉が同時に呟いた。

その呟きを聞いた快斗は、パンドラをしまつてから、「ああ…綺麗

麗だけど…此の世に存在しちゃいけない物だ…これが俺がキッドになつて探していたパンドラだ…これを破壊したら怪盗は廃業する…
青子…お前の父さんに言つてもいいぜ…中森警部喜ぶだろうな…キッドを捕まえたら…」

と言つた。その表情は青子を騙し続けた罪悪感でいっぱいであつた。

その快斗の表情を見た青子は、

「快斗のバカ！！なんでそんな事言つたの！？…確かに快斗がキッドでその事を黙つていたのはショックだよ…でも青子は快斗が本当の事教えてくれて嬉しかった…後…快斗…逮捕されないで…お父さんにも誰にも捕まらないで…青子は快斗がいればいいのに…何で気づいてくれないの！？バ快斗！！」

「…青子…」

この時、皆は2人のじゃまをしないように黙つていた。

「なあ平次…平次はアタシに隠し事してへん？」

青子が少し落ち着いてから和葉は平次に尋ねた。

「ハア？何でそんな事聞くんや？」

急に妙な質問をされた平次は怪訝な顔をした。

「だつて…工藤君も黒羽君も蘭ちゃんや青子ちゃんに隠し事しとつたから平次もなんかアタシに隠し事してるんかと思つて…」

「アホ！んな事あるかい！」

この無意識の内に始まつた2人の漫才で場の空気は明るくなった。

第16章 退院後（前書き）

話の展開が速めかもしれませんが。

第16章 退院後

コナンが入院してから、蘭や少年探偵の皆は毎日のように毎日のように見舞いに来てくれていた。

哀は解毒剤の研究で忙しいのであまり来ない。

また、平次は、

「工藤が退院するまで帰れへんで!!」

と書いていたが、学校があるからと和葉に引きずられるように大阪に帰った。

コナンは2週間くらいで退院するできた。

次の日、コナンが小学校へ向かう途中、哀が小さい声で、

「…できたわよ…解毒剤…」

と話しかけてきた。

「マジか!？」

コナンは驚きながらも嬉しそうに言った。

「ええ…でもまだあなたに渡すつもりは無いわ…」

「ハア?何でだよ!？」哀の言葉にコナンはイラついた口調で言った。

「…あなた…彼女との約束覚えていないの?…あの子達に全て話すんでしょ?…後、転校手続きは博士が今日してくれる筈だから安心して」

コナンの問いに哀はクールに答えた。

「ああ…忘れてなんかいいねーよ…」

コナンも静かに答えた。

「あーっ!!またコナン君と哀ちゃんがごそごそ話してる!!」

「オメー等感じ悪いぞそういうの！」

「2人共協調性が足りませんよ！」

歩美がコナンと哀がこっさり話している事に気付き、その後、元太と光彦にも注意された。

「あら…ゴメンなさい…」

「ワリー、ワリー今行くからよ」

3人に注意されて、コナンと哀は走って10m程前にいる3人の所に向かった。

この時コナンは、

(コイツ等と一緒にいるのも後少しなんだな…)
としみじみと思っていた。

「ただいまー!!」

「あっコナン君おかえりー!!ちゃんと歩美ちゃん達に話した?」
学校帰り蘭はコナンが帰って来てすぐに聞いた。

「イヤ…まだ話してねーよ…今日博士が転校手続きして来たから明日話すよ…」

コナンはメガネを外しながら言った。

コナンはメガネを掛けている時はコナンとして、外している時は新一として蘭と話していた。

「そう…そういうえは新一、学校大丈夫?今年殆ど登校してないけど…進級できる?」

と蘭は新一に聞いた。

やはり蘭としてはそこが心配らしい。

「ああ大丈夫!!ジヨディ先生達が俺はFBIの捜査の手伝いでずっとアメリカにいた事にくれたから。補習のテストで全教科80点以上取れば進級できるってさ…」

「そう…なら大丈夫ね!!」

とコナンの話を聞いて蘭は嬉しそうに言った。

普通、全教科80点以上取るのはとてもたいへんなのだが、新1は全教科100点という事も珍しく無い程優秀だから安心できるのだ。

次の日、コナンはクラスメート達に転校の挨拶をした。

「コナン君…行かないで!!」

放課後、歩美が泣きながらコナンに頼んだ。

「歩美ちゃん…」

コナンも悲しそうな顔をしていると、元太と光彦もやって来た。

「歩美ちゃん、元太、光彦、話があるから一緒に米花公園まで来てくれないか…」

「うん…」

コナンは3人に全てを話すために歩美、元太、光彦と一緒に米花公園へ向かった。

第17章 少年探偵団

「それでコナン…話って何だよ…？」

米花公園に着いて、元太が開口一番に言った。

その口調は深刻な話をされるのだと分かっているような感じだ。

歩美と光彦も表情からしてその事を分かっているようだ。

「実は…江戸川コナンなんて人間は…存在していなかったんだ…」

コナンはこの事を3人に言うのが1番辛かったがあえて最初に言った。

コナンの予想もしていなかった言葉で3人は暫く呆然としていた。

「…何で？…コナン君なら今ここにいるじゃん…何で存在してないなんて変なこと言うの…？」

歩美は涙を流しながら聞いた。

「…今から言う話は信じられないかもしれないけど…本当の事なんだ…実は俺…小学生の江戸川コナンじゃ無くて…高校生の…工藤新一なんだ…」

コナンはこう言うってから自分の身に起こった事を3人に話した。

哀の事は哀が宮野志保に戻るかどうかも聞いていないし、戻ら本人が話した方がいいと思ひ話さなかった。

「…灰原さんはこの事知っているんですか…？今ここにいませんけど…」

コナンがこんな大事な話をするのに哀を呼んでいない事を不信に思った光彦はコナンに聞いてみた。

「ああ…灰原なら知ってるから安心しろ…」

コナンは3人が安心するように言ったがあまり効果は無かったようだ。

コナンの話を聞いて、さっき以上に落ち込んでいる3人に、

「オイそんなに落ち込むなよ…確かに俺は転校するけど、米花町にはいるんだぜ…それに俺が新一に戻ってもお前等と仲間だって事は

変わらないし、忙しくない時はお前等が事件解決すんの手伝うぜ。それにたまには遊んでやるからよ。」
と言った。

コナンの言葉で3人は元気が出たようで、笑顔が戻っていた。

「そうだよな！！もう会えなくなる訳じゃねーし！」

「新一さんに戻っても遊んでくれるって言ってましたし！」

「約束だよ！！コナン君！！」

と元気を取り戻した3人は言った。

「ああ！！絶対に約束守るぜ！！」

コナンも3人の元気が戻ったのを喜びながら答えた。

それから、江戸川コナンとしては最後になるから思いつ切り遊ぼうという歩美の提案で、元太と光彦が、もう1人の少年探偵団のメンバーである哀を半分無理やり連れて来て5人で日が暮れるまでサッカーをした。

「ったく…こんな遅い時間まで…アイツ等叱られても知らねーぞ…」

コナンは歩美達と別れた後腕時計を見ながら呟いた。

「まあ、江戸川コナンとしてのあなたと遊ぶのは最後だから仕方ないんじゃない？」

「そうだな…そういえば灰原、お前も宮野志保に戻るんだよな？」

コナンは哀に聞いてみた。

「さあ…どうかしらね…あなたが戻った後様子を見てからにしようかしら…」

と哀はクールに言った。

「…俺は実験体か…」

「あら…でも早く本の体で彼女に会いに行きたいんじゃないの？」

「うっ…」

「凶星ね…」

コナンと哀はこんなたわいの無い話をしていたが、コナンは明日新一に戻ると決めてからずっとコナンとしての思い出が頭をよぎっていた。

第18章 哀・志保（前書き）

題名が微妙です。

今回の話は好き嫌いが分かれるかもしれない。

第18章 哀・志保

少年探偵団に全てを打ち明けた次の日、コナンは江戸川コナンとして蘭と小五郎に別れを告げた。

「じゃあ、蘭姉ちゃんとおじさん、バイバイ！」

コナンの正体を知っている2人の前だったが、コナンは精一杯子供らしく言った。

「じゃあね…コナン君…今までありがとうね…」

「うん…蘭姉ちゃんも今までありがとう！」

この言葉を交わした時、蘭は涙目になっていた。

やはり、コナンと新一が同一人物でコナンが居なくなった後、新一が戻って来ると判っていていても、コナンとの別れは辛いのだ。

コナンと蘭が言葉を交わし終わると小五郎が口を開いた。

「まあ…あれだ…いつでも遊びに来いよな…もちろん探偵坊主の姿でもいいからよ…」

そう言った小五郎の顔は真っ赤であった。

コナンはその顔を見てクスリと笑い、

「うん！！また遊びに来るね！！」

と言った。

それから2人と少し言葉を交わした後、コナンは工藤新一に戻るため阿笠邸に向かった。

「灰原！！来たぜ！！」

コナンが阿笠邸に着いてこう言った。

「あら…早かったのね…あと静かにしてくれる？こんなに早く来るとは思って無かったから博士まだ寝てるのよ…」

「悪い…で解毒剤は？」

「…あなた…いきなりそれ？よっぽどその姿がイヤなようね…ハイこれよ…データ上では今までの試作品より苦痛は酷いけど命に別状は無いわ…」

と哀は皮肉を言いながら解毒剤を取り出した。

「サンキュー！！…アレ！？」

コナンは解毒剤を受け取るうとして手を出したが、哀は渡さなかった。

「…灰原…？」

コナンは哀が暗い表情をしている事に気付いた。

「灰原…どうしたんだ？」

コナンは哀に聞いた。

「…私…いつの間にか…あなたを好きになっていたようね…でも、気にしなくていいわ…あなたには蘭さんがいるし…彼女には幸せになってもらいたいから…」

「灰原…」

哀の突然の告白に驚いていたコナンだが、

「ゴメンなさい…今の忘れて…」

という哀の言葉で我に帰った。

「ワリーな…灰原…やっぱ俺は蘭じゃねえと…それにお前に俺じゃダメなんだよ…明美さんを救えなかった俺じゃな…だから…お前は明美さんが安心してお前を任せられる奴を選べよな…」

コナンは未だに哀の姉宮野明美を救えなかった事を悔やんでいる事はコナンの表情からも読み取れる。

「工藤君…」

「でもお前は俺の最高のパートナーだぜ！ホームズとワトソン…イヤ…それ以上のな！！」

とコナンは笑って見せた。

「ありがと…ハイこれ解毒剤…」

哀はコナンの言葉に微笑んでコナンに解毒剤を渡した。

コナンは解毒剤を受け取った後、

「サンキュー！！…で、お前も宮野志保に戻るんだよな？」と聞いた。

「いえ…お姉ちゃんが死んだ今…宮野志保を待っていてくれる人はもういないけど、灰原哀には博士や吉田さん達がいるから…私は灰原哀としてやり直すわ…お姉ちゃんが私のお姉ちゃんって事は変わらないしね…」

と哀は答えた。

哀の答えにコナンは微笑んで、

「お前らしいな…それじゃ灰ば…イヤ哀…」
と言った。

「…えっ!?!」

急にコナンが自分の事を哀と呼んだので哀は驚いていた。

「…まあ、俺は高校生の工藤新一に戻るんだ…見た目が小学1年生の奴を高校生が名字で呼んでたら変だろ？だからこれから哀って呼ぶからな…じゃ、哀、これからよろしくな!!」

哀が驚いているのを見てコナンは急に哀と呼んだ理由を話した。

その言葉に哀は、

「ええ…よろしく、工藤君…後、私を振ったんだから蘭さんを幸せにしなさいよ…もしできなかつたら…私の薬のモルモットになってもらっわよ…」

「…絶対アイツは幸せにするよ…」

コナンは哀の脅しに冷や汗をかきながら答えた。

「じゃあ哀、コナンとしてはじゃあな…」

とコナンは言って部屋を出て言った。

「どうやら…工藤君が解毒剤を飲んだようね…」

哀は心配そうな表情で答えた。

「大丈夫じゃろうか…」

「データ上では大丈夫よ…でも10分経っても何も連絡が無かったら見に行った方がいいわね…」

と哀は言った。

10分後、

「哀君…そろそろ10分経つんじやが…」

と、博士は心配そうに言った。

「…そうね…もしものために用意した応急処置の薬も手遅れかもね…」

「…そんな…!!」

哀の言葉に博士が声を詰まらせた時、ドアの方から、

「誰が…手遅れ…かよ!?!」

という声が荒い息遣いと共に聞こえてきた。

「新一君…無事じゃったんじやな…」

博士は涙ぐんでいた。

「おいおい…泣くなよ博士…俺は…無事なんだから…」
と新一が博士を宥めていると、

「…無事のわりには息遣いが荒いわね…」

と哀が皮肉を言った。

「ああ…おかげで…さっきまで気絶してたぜ…」

「そう…とりあえず…これを飲みなさい」

と哀は錠剤を取り出した。

「…なんだ?…これ?…」

もう新一に戻ったのに哀に渡された薬を新一は不思議そうに見た。

「栄養剤よ…あなた…今のももの凄く体力を消耗したわ…だからす

ぐに栄養になるこついった物でも摂取しないと体が保たないわ…」
と哀は説明した。

「そうか…サンキュー!!!」

と言って新一は栄養剤を飲んだ。

第20章 電話（前書き）

今回、新一と蘭の会話がメインです。

第20章 電話

新一は栄養剤を飲んですぐ、

「じゃあ…蘭の所…行って来る…ありがとな…哀も…博士も」
と言って阿笠邸を出ようとしたが、哀に

「…あなた…そんなフラフラな状態で彼女の所行くつもり？それじゃ彼女を心配させるだけよ…体力が回復してから行きなさい」
と止められて、

「わかったよ…」

と言って暫く休む事になったが、数分ごとに、

「もう…大丈夫だ…」

と言って、蘭の所に行こうとするので哀は仕方なく、腕時計型麻醉銃で新一を眠らせた。

哀に麻醉針を撃ち込まれて12時間後、新一は目を覚ました。

「意外と長く寝てたわね…まあそれだけあなたの体力が消耗してたってことね」

と哀が腕時計を見ながら言っていると、

「哀…ダメエ!!!」

と新一が唸った。

それを見た博士は、

「これ、新一君、哀を責めるんじゃない。哀君はキミが無茶せんように麻醉銃でキミを眠らせたんじゃない」

と哀をフォローした。

「けどよお」

新一はまだ何を言おうとしていたが、哀の、

「いいけど、早く彼女の所行かないの？」という言葉で、

「ヤバっ、じゃあ博士！哀！行ってくるぜ！！」
と言って走り去ってしまった。

新一が去った後、哀は微笑んで、
(全く…名探偵さんも蘭さんの事になると扱いやすいのよね…)
と思っていた。

新一はポケットから何かを取り出した。

これは、さつき解毒剤を飲んだ後、自分の部屋から持ってきた物だ。

それをじつと見た後、蘭に電話した。

『もしもし！新一？』

蘭が電話に出た。

「よお蘭！！元の体に戻ったぜ！！」

『そう！！良かった…』

電話越しに聞こえる蘭の声は嬉しそうであつたがどことなく淋しそうだった。

「…そうだよな…お前にとっては俺もコナンもどっちも別の存在だからな…」

蘭の気持ちを察したように新一が蘭に言った。

『うん…』

蘭も淋しそうに答えた。

「でも大丈夫！お前とコナンとして過ごした時間は嘘じゃねえし、たまにはコナンとして電話してやるぜ、久しぶり！蘭姉ちゃん！
！…てな！」

新一はコナンの台詞の部分を蝶ネクタイ型変声機を使って言った。

その事に蘭はクスツと笑って、

『いいよ、新一とコナン君は一緒の人なんだから。新一が居てくれ
たら大丈夫！』

と答えた。その声にはいつも通りの元気な声に戻っていた。

「蘭…じゃあ、今からそっち行くぜ!!」

『うん!!』

電話が終わってから新一は走り出した。

新一の頭の中には今、

(新一として早く蘭に会いたい)
という事しか無かった。

21章 約束(前書き)

いよいよ完結です!!

21章 約束

現在PM8:30、蘭の親友の鈴木園子は友達とのショッピングの帰りだった。

（あーっ今日も楽しかったなー！蘭も来れば良かったのに…用事って何だろう？）

と考えている時だった。

突然、何ヶ月かぶりに見るクラスメイトが道の向こうから凄い勢いで走って来たのだった。

「あっ！！おい！！新一君！！久し…」

ここまで言ったところでそのクラスメイトとすれ違って、見る見るうちにその影は小さくなっていった。

どうやら彼は園子に全く気づいていなかったようだ。

「……………」

園子は暫く呆然と新一が去った後を見ていたが、

（ハーン…あの新一君があんなに猛ダッシュしてるって事は蘭に
関係してるなー！！もしかして、元の体に戻ってすぐに告白！！な
んて事もあるのかしらねー）

と蘭から話は聞いてコナンと新一が同一人物だと知っている園子は
ニヤニヤしながら考えていた。

一方、新一は蘭の事しか頭に無くて園子とすれ違った事にさえ気づいていなかった。

「ら〜ん！！！」

新一の連絡の後ずっと外で待っていた蘭の耳にずっと待ち焦がれていた人物が自分を呼ぶ声が聞こえた。

「新一!!!」

蘭がその人物の名前を呼んだと同時に新一は蘭の目の前で立ち止まった。

「蘭…ただいま…」

新一が優しい眼差しで蘭に言った。

蘭も目に涙を浮かべながら、それでも幸せそうな顔で、

「お帰り…新一…」

と言った。

「で…新一、私に聞きたい事って何？」

「ハッ!?!」

急に蘭に聞かれると思っていなかった事を聞かれた新一は戸惑った。

そんな新一を見て蘭は、

「約束したじゃない!!元の体に戻ったら教えてくれるって!!」
と怖い顔で言った。

「ああ…じゃあいうぜ…コホン…」

新一は咳払いをしてから、

「蘭!!俺はお前の事ただの幼なじみだなんて思ってねーからな!

!」

「へっ!?!」

聞きたい事らしくない事を言われた蘭は驚いていた。

「…だから!!俺は死羅神様の事件の後、お前言ったが俺に聞きたい事の答えを言ったんだよ!!俺の推理じゃ、俺の聞きたい事と蘭の聞きたい事は一緒だからな…お前は俺に『新一は私の事をどう思っているの?』って聞きたかったんだろ?」

と言った。

「うん…」

蘭は赤くなりながら答えた。

「じゃあ、俺の答えは伝えたから今度は蘭が答える番だ…」

新一も赤くなりながら言った。

「新一！！そんな推理できてるなら言わなくっても分かるでしょ！！」

蘭は更に赤くなって叫んだ。

「お前の声で聞きたいんだよ…」

「イジワル…私もただの幼なじみだなんて思っていないよ…私…新一の事…」

蘭がここまで言うとな新一が、

「蘭、俺はお前の事が好きだ！！」
と叫んだ。

「新一…私も…」

今、新一も蘭も顔は真っ赤だ。

「蘭ほらこれ…」

新一は急にぶつきらぼうになつて蘭に何かを渡した。

これは蘭に電話する前に見つめていた物だ。

それは手のひらに乗るような箱だった。

「…これ…」

蘭は受け取った物が何か分かったような気がして赤くなりながら言った。

「…開けてみるよ…」

新一も赤くなつているもはやいつものポーカーフェイスなどどこにもない。

蘭は開けてみた。

そこには、緑色の宝石が散りばめられた指輪が入っていた。

「エメラルドだ…本物の…本当は文化祭の次の日に米花センタービルで渡そうと思つてたけど、その前にコナンに戻つちまつたからな…じゃあ…改めて、蘭！！俺は蘭が好きだ！！俺と付き合つて下さい！！！！」

新一はこれ以上無い程に赤くなって告白した。

「ハイ！！喜んで！！……こちらこそ……付き合っして下さい……」
蘭も同じ程赤い。

「……蘭……」

新一は蘭の名前を呼んでから蘭を抱きしめてた。

そして2人の唇が重なった。

「じゃあ！！蘭！！また明日な！！」

キスした後、新一は真つ赤な顔で帰って行った。

帰り際、新一は小さく

「約束、守ったぜ……蘭……」

と呟いた。

それは新一の独り言だったので当然それは蘭の耳に届いていなかった。

後日、新一はテストで全教科100点という恐ろしい程の高得点をとり、無事進級できるようになった。

また、新一と蘭が夫婦と言われても否定しなくなり、蘭の指には指輪がはめられている事で今まで以上にクラスメートに冷やかされるようになったのは言うまでもない。

破れない約束 完

21章 約束（後書き）

完結しました。

駄文だったけど最後までお付き合い頂きありがとうございました

！！

今度、この続きを書きたいと思っています。

まあ、続きと言っても独立した話ですけど…

いつになるか分かりませんがお楽しみに！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6327h/>

破れない約束

2010年10月9日14時23分発行